

コープしが「ボランティアバス南三陸町支援隊」

厳寒と強風の中でカキ生産者を支援

コープしがの「ボランティアバス南三陸町支援隊」は、2月18日と19日に宮城県南三陸町で支援活動を行ないました。18日は宮城県漁協志津川支所でカキの生産再開の準備であるイカダ作りを手伝い、19日は南三陸町ボランティアセンターで活動しました。厳冬期の東日本大震災被災地でのボランティア活動が全体的に縮小する中で、コープしがは、昨年12月から今年3月にかけて4回の支援隊活動を計画し、今回は3回目の活動になります。

17日の夕刻、18時に滋賀県の野洲本部をバスで出発して車中泊。18日朝9時に志津川町袖浜にあるカキ処理場(津波で壊滅したカキ剥きの作業場)に到着。男性ばかり31人(19歳~72歳)のコープしが職員・役員・生産者の方が朝9時から養殖イカダの錘(おもり)づくりに取り組みました。この錘づくりはカキの生産に向けた準備で、カキの種を挟み込んだロープを海に垂下する(海中に吊るす)ための錘に使うものです。ここだけで約6万個が必要といわれています。

錘づくりは、石を細かくくだいた砕石(さいせき)をスコップですくって、袋に入れて土のう(どのお)をつくる作業のくり返して、大変な重労働です。朝の気温はマイナス5度以下で冷え込みが厳しく、冷たい強風が海から吹き込み、時おり雪が吹き付ける厳しいコンディションでした。そのうえ、砕石が凍り付いていてスコップですくうだけでも力が必要です。それでも午後3時の作業終了予定時間前には、10トン以上はあったと思われる砕石の山は、すべて錘に変わっていました。



強風や雪にも負けず、

ボランティアを行なうコープしがの職員たち。

ボランティアの一員としてコープしがの白石一夫(しらいし かずお)専務

理事も参加しました。「コープしがは、宮城県内に産直産地を持っていませんでしたが、昨年8月に南三陸町の支援に行きました。冬になって各地のボランティアセンターが解散する中、この南三陸町は活動を中断できる状況にはないということを知っていました」。そこで生協の被災地支援のセンター的役割を果たしているみやぎ生協に、「私達の力を生かせる場所を紹介していただきたい」と相談したところ、みやぎ生協のカキの産直産地である南三陸町の復興を支援していただきたいと、宮城県漁協志津川支所を紹介していただいたと白石さんは言います。コープしがが志津川支所への支援に入る度、みやぎ生協からも職員が同行。この日も産直推進本部の大越健治(おおこし・けんじ)さんと生活文化部の和賀恵治(わが・けいじ)さんが駆けつけ、漁協の組合員の方々と作業について打ち合わせをしていました。

カキが商品になったら心を込めてお勧めしたい

志津川支所のカキ部会長の遠藤勝彦(えんどう・かつひこ)さんによると、みやぎ生協が南三陸町の袖浜をカキの産直産地に指定したのは十数年前のことだそうです。みやぎ生協は、食品の衛生検査などのデータを漁協に提供したり、台風の被害にあったときなどは、応援のメッセージを送るなど、交流を進めてきたといいます。

志津川支所には三つのカキ処理場がありましたが、いずれも津波で破壊され現在再建を計画中だと言います。「津波は海底をかき回すように襲って来るので、養殖中のカキイカダはほとんど破壊され、昨シーズンは収穫ができませんでした。試験的に昨年6月に種ガキを海に入れ、それを今日水揚げしてみました。僅か8カ月(通常の養殖期間は足掛け2年)ですが、思っていたより早く成長し熟成も進み、いい味わいです。津波で海が綺麗になったことだけでなく、間隔を広くとって種ガキを垂下したのがよかったようです。しかし、処理場が復旧しておらず、カキ剥きができないのと、検査などが必要で、まだ出荷はできないといいます。実はこの日、コープしがのボランティアの方々にカキを試食してもらおうと、未明から震災後初の水揚げが試験的に行なわれ、カキ鍋がふるまわれました。

「コープしがの皆さんに来ていただき、大助かりです。生産準備では、短期間に作業が集中するので人手がいらいます。我々のために皆さんが気持ちをそろえて遠いところから来てくれることが本当にありがたいです。その思いが嬉しい」遠藤さんは言います。

ボランティアに参加した南草津センター組合員担当の森下琢也(もりした・たくや)さんは、ボランティア活動は初めてだといいます。初めて見た被災地の様子を「テレビでは見ていましたが、実際に来て見て、被害は思っていたより大きいと感じました。海沿いの



カキ鍋がコープしがのボランティアにふるまわれた。

家は土台しか残ってなくて自然の力の恐さも感じました」。さらに森下さんは、「到着してすぐに、被災直後に遺体を安置したホールを見せてもらい、数百人の死者行方不明者が南三陸町にいらっしやると聞いたり、実際に被災地を見たりした経験は大きいと思いました。支援活動は地味な作業ですが、漁協の復興に少しでも役立っていると思うと、やりがいがあります」。そして最後に、森下さんは、「カキが商品になったら買ってくださいと、心を込めたお勧めができると思います。『頑張ってはるので、一度ご購入を検討いただけますか』と、この経験を組合員にお話しし、センターの仲間にも広めて業務の中で活用したいです」と話してくれました。

ボランティアバスを担当するコープしがの神門浩(かみかど・ひろし) 渉外・震災担当は、「南三陸町へのボランティアバスには、毎回、西山理事長や白石専務理事など役員が

参加することが、コープしがの大きな特徴で、厳しい季節にもかかわらず、多くの職員が参加しています。今回の作業も体力勝負ですが、専務理事が率先して働いているので非常に早く作業が進んでいます。ほぼ今日中に袋入れは終わると思います。そして、3月のボランティアバスが最後になりますが、次回は女性を中心に参加を募り、仮設に住む方々のお手伝いを計画しています。男ばかりがボランティアに行くことに女性職員から不満が出ているからなんです」と言います。

被災地の復興に向けて、コープしがの職員たちは、一丸となって、全身全霊で支援に取り組んでいる。